

研究ノート

戦国期の本願寺・一向一揆と大内氏

——音信・瑪瑙・渡唐船

井戸 裕貴

はじめに

第1章 本願寺・一向一揆と渡唐船

第1節 細川氏の渡唐船派遣計画と本願寺

第2節 本願寺・一向一揆と細川氏の渡唐船派遣計画

第2章 証如と一向一揆と瑪瑙

第1節 大内氏による渡唐船交易と加賀の瑪瑙

第2節 本願寺・大内氏の音信と瑪瑙

第3章 証如の音信と大内氏

第1節 証如の音信政策と加賀の瑪瑙

第2節 一向一揆と加賀大内氏

むすび

はじめに

戦国時代（15世紀半ば～16世紀末）の本願寺や一向一揆を国際関係史のなかに位置付けることはできるのか。本稿の狙いは、この一点にある。後述するように、先行研究においても、両者と海外交易を結び付ける試みは行われてきたが、あくまでも両者が海外交易に関係しているという事実の指摘にとどまっている。両者を国際関係史に位置付けるには、両者がどのように海外交易に影響を与えたのかを確認する必要がある。そこで、以下では国際関係史の研究史と本願寺・一向一揆の研究史を押さえつつ、その課題を整理する。

戦国時代における日本列島と東アジア・東南アジアなどとの交流は、戦前から知られており（小葉田 1941）、1950年代ころに倭寇の実態や日明交易について検討した田中健夫氏の成果を嚆矢として、1980年代以降の村井章介氏の諸論考以降に活発化した（田中健夫 1959、同 1961、村井 1997）。その一連の研究のなかで、特に西国の大名や商人による琉

球・朝鮮半島・中国などとの交易の実態が究明され、その交易に禅僧のネットワークが大きな役割を果たしていたことや、戦国期の畿内政治史の深化とともに、分裂した將軍家の動向と日明交易が大きく関係していたことなどが明らかになりつつある（伊藤 2002、橋本 2005）。

そして、国際関係史の焦点の一つとして、大永 3 年（1523）に渡唐船交易の主導権をめぐって細川氏と大内氏の使節が激突した寧波の乱と、その前後の細川氏・大内氏の関係性についての議論を上げることができる¹。その研究史については、近年の岡本真氏の整理（岡本 2022）が簡にして要を得るものであるからここでは触れないが、本願寺・一向一揆を国際関係史に位置付けるには、特に渡唐船交易に注力していた細川・大内両氏との関係性を踏まえる視角が一つの有効と考えられる。

一方、戦国時代の本願寺・一向一揆研究については、特に一向一揆の研究が 1960 年代から大きく進められた（笠原 1962、井上 1968）。その後、峰岸純夫氏は永禄 11 年（1568）の織田信長上洛以前の畿内戦国史に一向一揆や本願寺を位置づけ（峰岸 1974）、藤木久志氏は織田政権の全国統一事業のなかに本願寺・一向一揆との戦いを位置づけた（藤木 1975）。その後、本願寺・一向一揆研究は寺内町を中心とした都市史や宗教史、文学など様々な角度から進められている（代表的なものとして、都市史研究は、仁木 1997、小島 2005、宗教史研究は、金龍 2004、安藤 2019、文学研究は、塩谷 2021、を参照）。

また、国際関係史と日本中世仏教史の接合については既に多くの研究成果を生み出している。禅宗については特に顕著で、海外交易における禅僧の宗教的人脈の活躍などが知られている。しかし、戦国仏教として戦国時代には教線を拡大して日本国内に多大な影響を与えたといわれる本願寺・一向一揆について、国際関係史に位置付ける研究は管見の限り見られない。それは、その活動が国際関係史に全く無関係であったわけではなく、研究者の視角の欠陥でも決してなく、史料の残存状況に大きく制約されていることが大きな理由であろう。ただし、本願寺・一向一揆研究を国際関係史に位置付ける光明は皆無ではない。

そして、その試みは、一向一揆の構成員たる地域社会の人びと、一向一揆に対抗する人びとの動向を通じて、一向一揆の勢力が浸透する列島社会の広い範囲を国際関係史に位置づけることにつながるであろう。

国際関係史と本願寺・一向一揆研究史は、ひとつの接点として、天文年間に細川氏が派遣を試みた「渡唐船」について検討してきた。その試みは戦前の田中清三郎氏から始まっており、氏は本願寺が渡唐船交易によって収入を得ていた可能性について示唆した（田中清三郎

¹ 以下、一般に遣明船として論じられてきたものを、「渡唐船」という史料上の用語で表す。その理由については、当時の人々が「唐」ではなく明王朝に交易船を派遣していると認識していると明瞭に示す「渡明」「遣明」などの史料上の表現があまり見られず、特に本稿で扱う天文年間の史料にはほぼ見られないためである。したがって、一般に遣明貿易とされるものも「渡唐船交易」と記す。本稿でその問題に踏み込む余裕はないが、改めて検討する必要があるだろう。

1942)。この指摘を受けた大畑博嗣氏によると、渡唐船派遣について本願寺が主導しており、天文初年の畿内を舞台にした天文の一向一揆で摩耗した本願寺の財政を再建するために、本願寺が計画したという（大畑 2007）。この大畑説に対して、岡本真氏は本願寺が細川氏と堺商人による渡唐船派遣に協力していたことを確認しつつも、本願寺はあくまでも細川氏と堺商人の協力者であるとして、その主体的な関与を否定した（岡本 2015）。

岡本氏が述べたように、渡唐船派遣は細川氏が発案した計画であり、本願寺は自らのネットワークをもって堺商人を支援したに過ぎないため、本願寺が細川氏による渡唐船派遣を主導していたと結論付けることは難しい。しかし、そこに本願寺の意思決定が存在したことも事実であり、本願寺の立場から細川氏による渡唐船派遣を捉え直す検討が重要ではなかろうか。

また、大内氏による渡唐船派遣を通して、本願寺・一向一揆を国際関係史に位置付けることは可能である。細川氏に対抗していた大内氏が、渡唐船交易において重要視されていた瑪瑙を本願寺に求め、本願寺が瑪瑙を産出する加賀に拠点を構える一向一揆に、瑪瑙の拠出を要請していたことは既知の事実であるが（神田 2014）、その際に本願寺や一向一揆が大内氏の単なる協力者であったと位置付けてよいのか疑問が残る。このように天文年間の渡唐船交易を通して、本願寺・一向一揆を国際関係史に位置付けることには、十分可能性があるのである。

従来の渡唐船研究は、細川氏・大内氏や堺商人など直接渡唐船交易に従事する者たちの動向や政治構想などを中心に検討されており、その研究手法によって本願寺・一向一揆を国際関係史に位置付けることは難しいであろう。しかし、渡唐船派遣における本願寺・一向一揆の主体性を窺わせる史料が全くないわけではない。上述したような細川氏の渡唐船派遣をめぐる本願寺の動向、渡唐船派遣にともなう交易品としての瑪瑙をめぐる大内氏との交渉などは、本願寺側の史料（とくに『天文日記』）をもとに検討されてきており、その好例といえる。渡唐船派遣において、『天文日記』の記主であり、当時本願寺の頂点に立っていた証如がどのように考えて行動したのか、証如を介して大内氏の要請を受けた一向一揆はどのような狙いをもって活動していたのか。これらの点について、本願寺・一向一揆それぞれの立場から見直す必要があるであろう。

そこで本稿では、本願寺・一向一揆と有力大名（特に大内氏）との交流、その政治的判断や影響力、歴史的位置について再検討する。

第1章 本願寺・一向一揆と渡唐船

第1節 細川氏の渡唐船派遣計画と本願寺

本章では、まず本願寺・一向一揆が渡唐船とどのように関わっていたのか確認する。以下

は、戦国期本願寺の基本史料たる『天文日記』に、渡唐船にまつわる記述が初めて登場する記事と、それに関連する記事である²。なお、本章で扱う渡唐船関係記事は、岡本氏によって細川氏が太田氏に対抗して計画した渡唐船派遣計画として検討されたものであり、太田氏が派遣した渡唐船と区別するために、細川氏が用意した渡唐船のことを以下「細川渡唐船」と表す。

【史料 1】『日記』天文 6 年（1537）3 月 10 日条

一、堺六七人之宿老中より、先日板原次郎左衛門尉ニ渡唐船請取候へかしと申付候に而三種三荷、無使ニ小西弥左衛門尉ニ事付而来候

堺の 6、7 人の宿老から証如に連絡があり、証如が板原という者に細川渡唐船を受け取るように指示したことを謝し、礼物が贈られた。なお、礼物を運ぶ人物については、宿老たちが、大坂方面に別の用事があったと思われる小西（堺商人）に託したという³。では、板原はどこに細川渡唐船を受けとりに向かったのか。

【史料 2】『日記』天文 6 年 12 月 24 日条

一、從一条殿尊翰来候、板原次郎左衛門ニ御事付候、御懇之御言伝被仰候、殊本寺建立候者、此間造営候唐船に、去年自山中四月ニ材木出候条、被貯之、此方可被差上由候

一条家は五摂家の一つであり、当時は家領の土佐国幡多荘を直務するために、土佐へ下向していた（中脇 2021 など）。【史料 2】によると、一条家当主の房家から書状が来て、板原に本願寺証如への伝言を託したという。つまり、板原は土佐に向かったのである。そして大坂本願寺が建築資材として材木を求めていたところに、房家が細川渡唐船造営のために入手して余った材木を、完成したばかりの細川渡唐船に積んで本願寺に送るという。

これは、本願寺からすれば大変ありがたい提案であったにちがいない。なんといっても、材木の一部を提供されることで、本願寺の建築資材にかかる出費を抑えることができる。しかも、その量は本願寺の需要を十分満たしたものであったのか、細川渡唐船が堺津に着岸した際に、証如は次のように記している。

² 『天文日記』の引用については、真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編』8～9（法蔵館、2015～17 年）を使用する。以下、『天文日記』を『日記』と略す。一部の注は筆者が加え、挿入記号は省略して該当文字を組み込んだ。また、返り点を付して句読点も一部改めた。『日記』の史料的性格については、井戸 2025 を参照。

³ 岡本氏は、小西の役回りを「証如と客衆のやりとりの仲介者」と位置付けている（岡本 2015: 59）。

【史料 3】『日記』天文 7 年正月 17 日条

一、堺南北十人のきやくしゆ<sup>渡唐之儀
相催衆也</sup>より、以、木屋宗観<sup>字不并
し知</sup>小西宗左衛門、五種五荷到来候、
其謂者、去年板原次郎左衛門ヲ土佐へ下候へと為、惣中、申候へ共、不、罷下、候間、為
此方、申付下候様にと申て候つる間、申付下候、然時ニ渡唐船出来候、祝着之由申て
如、此候、於、寢殿、卒度会候、綱所にて歡盃候

(中略)

一、堺之使綱所にて歡盃之時申たるとて上野申様、彼唐船自、堺津、出、之候へハ、其例
吉之^(前)之由候て、来夏のほり候へく候、然者堺浦にハ船少も懸候ハす候、即波にて打
わり候間、紀州に藤白湊、又一二ヶ所<sup>在所失
念候</sup>、此所ハ如何様ノ大波・大風にも山きわ
へ寄候間、不、苦候、然者為、紀州へ申付、同かこ廿人云下候へ、此由自、一条殿、此
方へ可、被、仰候、先以、内儀、自、堺申越候へのよし候間、申とて申候、板原材木事申
候へ共只今更無用候間、取上間敷由申候

木屋は、小西と同じ堺商人であったと推測されている（岡本 2015）。木屋と小西の 2 名
を使者として堺の客衆たちから証如へ礼物が届けられた。そのわけは、先述した板原が堺の
客衆の指示では土佐に向かわなかったため本願寺に口添えを要請したところ、板原が土佐
へ赴き、細川渡唐船が堺津に着岸したことにあった。

また、堺からの使者に應對した下間上野が証如に伝えた内容は、以下の通りである。既に
細川渡唐船は堺津を出たようで、同年の夏には再び堺津に赴くという。そこで上野は、堺津
から土佐への航路は波が厳しいため、紀伊国藤白湊（現在の和歌山県海南市）などに停泊し、
「大波大風」を避けるよう助言した。そしてその場で、紀伊門徒に水主を 20 人ほど融通さ
せることに決した。その指示は、一条家から本願寺への要請というかたちをとることにした
という。以上が堺からの使者と上野の間の取り決めであり、それに加えて板原が材木を用意
すると申し出たといい、証如は全く必要ないと断じ、材木を取り上げてはならないと伝えた。

記事の最後の部分から、板原は恐らく細川渡唐船の建築材・修復材を必要と感じたのであ
ろうが、証如のもとには既に房家から受け取った多くの材木があり、証如はそれを活用しよ
うと考えたようである。

ここで気になるのは、板原の立場であろう。三浦周行氏によると、彼は堺の町人であり、
熱烈な門徒であり、一条家と交渉できる便宜を有する存在であったという（三浦 1930）。
堺の客衆たちが彼に土佐への下向を求めた事実から、堺町人にとっては板原が身近な存在
であり、板原もまた堺町人であった可能性は高い。そして証如が要請すると受け入れたこと
から、「熱心」であったかはともかく、本願寺門徒であったと考えるのが自然である⁴。さら

⁴ ただし一条家とのつながりについては、疑問が残る。恐らく紀伊門徒に水主の出動を要請する際に、一
条家からの要請という形式を求めた事実と結びつけた推測と思われるが、さらなる検討を必要とする。

に後掲の【史料4】に記されているように、細川渡唐船が着岸したのが堺の本願寺派寺院である慈光寺道場の近辺であったことを踏まえると、板原は慈光寺道場に属していたと思われる⁵。

そして慈光寺は、同じく堺に居を構えていた信証院・善教寺と合わせて「堺の三坊」と称された有力寺院であり、大永5年（1525）には和泉・紀伊など9か国にわたって門徒を擁していたという（中井 1930）。板原が紀伊門徒に指示して材木を用意させようとした背景には、慈光寺を介した人脈が存在したのであろう。

岡本氏が注目したのは、細川渡唐船派遣計画における木屋や小西、板原といった堺商人の主導的役割であり、その準備過程で本願寺の人脈を利用したと論じている（岡本 2015）。たしかに氏が指摘したように、証如も堺商人について、【史料3】において「渡唐之儀相催之衆」と述べており、その事実は疑いないが、堺商人に焦点を合わせた結果として、本願寺の主体性に対する評価が後景に退いてしまったのではないか。この点については、氏の所論に修正を加えるべきであろう。

例えば、証如は一条家からの細川渡唐船着岸によって、本願寺の建築資材を得るという利益以上に、大きな効果を期待しえた可能性がある。それに関係すると思われるのが、以下の2つの記事である。

【史料4】『日記』天文7年12月1日条

一、就_レ唐船見物之儀、以_レ隱密_一堺津へ越候、慈光寺道場へ着候、板原次郎左衛門依_レ馳走_一也、即及_レ晩彼船加_一一覽_一候、於_レ船中_一客衆折樽到来候（後略）

【史料5】『日記』天文9年3月11日条

一、広橋・白川へ唐船可_レ有_一見物上_一之由申候へハ被_レ越候（後略）

上は、前述の細川渡唐船が堺津に着岸した後の記事であるが、【史料4】において証如はなぜか夜になるのを待って「隱密」に渡唐船見物を行っている。しかし、なぜそのようなことをしたのか。

そこで【史料5】と合わせて考えると、証如の狙いが見えてくる。天文年間において大坂本願寺には頻繁に京都から公家などが下向していたことを知られているが、【史料5】の時期には公家の広橋と白河が本願寺に滞在していた。ここで興味深いのは、証如の誘い文句である。証如は堺で渡唐船を見物するだけでなく、渡唐船に「上る」ことも勧めているのである。

従来この渡唐船見物についてはあまり検討されてこなかったが、【史料4】でも夜になる

⁵ 大畑氏は、「慈光寺と関係が深い人物」と慎重な推測にとどまっている（大畑 2007: 9）。

のを待ってから、堺の客衆たちからわざわざ「船中」で礼物を受け取っており、船に乗ることを重視しているのである。【史料 5】には乗船した時間が記されていないが、証如が夜になるのを待っていたことから分かるように、自身が渡唐船に乗ることを世間から隠していたように窺える。

この証如の行動には、何らかの証如の意図を読み取るべきではなかろうか。そしてそれは、証如が渡唐船に「上る」ことを重視していることを踏まえると、岡本氏が細川渡唐船派遣をめぐって板原と堺商人の活動や彼らの意志を重視し、協力者として評価した証如に、海外との接触について関心があったことを示している。たとえば【史料 4】のときには、証如が渡唐船の構造に関心を持ち、実見するために乗船したと考えることもできる。

そして【史料 5】から、広橋と白河を通して将軍家にも細川渡唐船着岸に本願寺の人脈が活きたということを強調する狙いもあったと考えられる。なぜなら、『日記』の同日条には、白河は近衛家の書状も携帯していたと記されており、渡唐船見物についても近衛家に報告される可能性が高いからである。よく知られているように、近衛家は将軍家と縁戚関係にあって政治的にも結びつき（黒嶋 2004）、広橋家は世襲化した武家伝奏として将軍家と結びついていた（瀬戸 1993）。証如が白河の背景に近衛家、そして将軍家の存在を意識していたことは間違いない⁶。

以上本節では、細川渡唐船の用意、派遣、さらには渡唐船に乗るなど、証如が細川氏の渡唐船派遣計画に主体的に判断し携わっていたことを確認した。そして後掲【史料 6】や【史料 7】においても、証如の主体的な政治的判断について、証如自身が渡唐船について「此方申付ニよりて」と認識し、堺の客衆も「悉皆此方より依_レ申付_二相調」と述べるなど（「此方」は本願寺のことを指している）、渡唐船派遣における証如の役割を非常に高く評価しており、その一連の積極的な活動を踏まえると、証如を単なる「協力者」と位置付けることは過小評価であろう。では、本願寺を語るにあたって、その関係性を注目すべき一向一揆がどのように細川渡唐船をめぐる本願寺の判断に影響を与えたのか、次節で考える。

第 2 節 本願寺・一向一揆と細川氏の渡唐船派遣計画

『日記』からは、その史料的性格もあって、証如が政治的判断に試行錯誤している姿を見出しうる。前述の渡唐船見物もその一例であるが、ほかにも以下のような検討すべき事例が知られる。

⁶ 後に富小路という者が唐船見物をしたという記事も見られるが、その際には乗船していない（『天文日記』天文 9 年 4 月 26 日条）。富小路家は、もともと近衛家と対抗関係にある九条家の諸大夫の家柄であり、証如は九条家とのつながりも意識しつつ、近衛家や将軍家を重視していたのではないかと推察される。

【史料 6】『日記』天文 8 年（1539）2 月 3 日条

一、從_{之也}堺客衆^{唐船}彼船之儀此方申付ニよて、当津無_{相違}付候、即其礼可_{申之}処兎角遅々、失_{素意}之由候て客衆六人来、五種十荷到来候、卒度会候て於_{綱所}飲_酒候

前述したように、証如は堺の客衆に口添えして堺津に船を用意させた。しかし、細川渡唐船を用意した証如に対する客衆からの返礼が遅れており、証如は少なからず苛立っていたが、客衆が本願寺を訪れて返礼を渡したことで機嫌を直した。また、客衆たちの訪問は、本願寺に別のかたちでの返礼をももたらした。

【史料 7】『日記』天文 8 年 2 月 4 日条

一、昨日客衆申事ニハ、唐船之儀悉皆此方より依_{申付}相調、当津まで付_{事候}、恭存候、又於_{唐船}五駄荷所^{（不脱カ）}并一人之乗前令_{進上}之由以_{目錄}申候
一、即返事ニ思_寄之段悦入候、然而所用無_{儀候間}、能々可_{申聞}之由申付候

客衆は酒宴において、細川渡唐船については、証如が指示から堺津着岸まで主だったことをほぼ全て整えたようなものであり、本願寺が派遣する「五駄」を置く荷物置き場と乗組員一人分の座席も提供するという。これは、「唐」において商売に従事することで利益を得ていた客衆からすれば、大いなる返礼であったといえる。しかし翌日、証如は思いがけない客衆の申し出を喜びつつも、必要ないと丁重に断った。

本願寺は、門徒からの「志」や「勧進」などのかたちで納められる金銭や現物で財政を保っていた。しかし、その財源は不安定であり、門徒が暮らす地域社会の状況次第で、規定された金額に達しなかったり、全く納められなかったりしていた⁷。そのような状況を鑑みれば、渡唐船交易による財政補填という選択肢は大いにあり得たはずである。しかし、その選択肢を取らなかったのはなぜか。その判断は、本願寺の政治的性格に起因していると考えられる。

戦国期の本願寺は基本的に室町幕府の体制下にあったが（神田 1998）、享禄 5 年（1532）には本願寺は幕府の有力者たる細川晴元と対立し、天文 4 年（1535）に晴元、同 5 年に晴元が擁する将軍義晴と和睦するまで、実に 5 年近くにわたって泥沼のような戦いを繰り広げていた⁸。

本願寺はこの一連の戦いで疲弊しており、田中清三郎氏が述べたような財政再建策を講じる必要があったことは確かであろう（田中清三郎 1942）。しかし、性急な判断は避けたのではなかろうか。天文の一向一揆やそれに続く天文法華一揆、それにともなう戦乱によっ

⁷ 筆者が近年検討した尾張国の事例は、その一例である（井戸 2024）。

⁸ この戦いの具体的な経緯については、金龍 1989、神田 2001、井戸 2025、を参照。

て畿内全体が疲弊しているなかで、本願寺が交易に参入することで利潤を獲得し経済的に急激な復興を成し遂げれば、またその「富貴」や「栄花」を妬まれ、かつて山科本願寺が焼き討ちされた際に、公家から「今日一時滅亡、併是天道也」（『二水記』天文元年8月24日条）と認識されたように、幕府や有力者たちから再び嫉視・警戒されることは必然であった。

当時の本願寺は、天文の一向一揆からの復興を目指して幕府や諸権門と慎重な態度で音信を行っており（石田 1995、井戸 2025）、その過程で本願寺に対する敵愾心を煽るような行動は、特に慎まなければならなかった。

加えて、本願寺は一向一揆との関係性という側面から考えても、客衆からの申し出を受けるわけにはいかなかったと思われる。本願寺は、「一揆的構造」という組織形態で一向一揆と関係を築いていた（神田 1995）。すなわち、大まかな理解として、本願寺は一向一揆というヨコのつながりによる組織と、タテのつながりで結ばれ、ヨコのつながりが強い一向一揆によるタテの突き上げに対して強い姿勢では臨めず、本願寺の決定も一向一揆の動向や志向性に規定されうるといった側面があった。

本章を通じて見てきたように、岡本氏が指摘したごとく、本願寺はたしかに自ら交易に乗り出すことはなく、経済的な利益を得ることもなかったが（岡本 2015）、それは受動的な政治態度などではなく、むしろ畿内の諸勢力への配慮、一向一揆との関係性を勘案して積極的に渡唐船交易による経済的な利潤獲得の可能性を放棄したのであり、それは多分に本願寺の政治的性格によっている。

また、本願寺が細川渡唐船派遣計画のなかで得るものが何もなかったわけではない。例えば、本願寺と堺商人との結びつきを確認しえたことは、本願寺にとってひとつの重要な成果といえる。また、幕府と親しい公家衆を伴った渡唐船見物によって、渡唐船派遣計画に本願寺が尽力したことを強調し、本願寺が渡唐船交易においてどれほど重要な存在であるのか、幕府に見せつける効果をも期待しえた。そうした本願寺の政治的判断や配慮も影響したのか、天文年間において本願寺は権力者に目を付けられることなく、その復興に注力できた。

ただ、実際には細川渡唐船は派遣されなかった。よって、あくまでも戦国期政治史の次元にとどまるとも受け取れるこの事例の検討のみでは、本願寺や一向一揆を国際関係史に十分に位置付けたことにはならないであろう。では、本願寺や一向一揆は、実際に渡唐船を派遣した大内氏の渡唐船交易とは、どのように関係したのか。その点について、次章で検討する。

第2章 証如と一向一揆と瑪瑙

第1節 大内氏による渡唐船交易と加賀の瑪瑙

前章では、証如が渡唐船交易に関してどのように判断を下していたのか、細川渡唐船派遣

計画をめぐる一連の動向から確認した。そのなかで確認したように、本願寺が自ら渡唐船交易に乗り出すことはなかった。しかし、本願寺は直接交易に携わらずとも、本願寺の影響下にあったと目される一向一揆が実効支配する加賀国で採れる瑪瑙が、渡唐船交易における重要な交易品であったことは間違いない。

そこで本章では、交易品として瑪瑙を求めていた大内氏の音信に証如はどのように対応したのか、瑪瑙を産出する加賀を実効支配していた一向一揆が、瑪瑙という交易品を通して渡唐船交易とどのように関係していたのか考える。

まず、証如が『日記』中で瑪瑙について初めて記した史料を検討する。

【史料 8】『日記』天文 5 年（1536）12 月 24 日条

一、從大内方書状^付段子一端以^レ使僧^ニ到来候、仍瑪瑙就^レ渡唐之儀^ニ入候間、所持候者所望候、又於^レ無^レ左様^ノ者、加州^ニ在^レ之物候間、廿給候へと被^レ申候、加州にてハなたの観音堂のした^ニ在^レ之由使申候

上によると、西国の雄大内義隆の使僧が書状と緞子を携えて大坂本願寺を訪れ、渡唐の際に瑪瑙を必要としているため、もし本願寺が持っているなら欲しい。本願寺が持っていなければ、加賀国江沼郡の那谷寺観音堂（現在の石川県小松市）の下（麓のことか）にあるから、20 塊譲って欲しいという。

この使僧の発言には、疑問を覚える点が少なからずある。そもそも大内氏と本願寺の交流については、『日記』のそれ以前の記事には見られない。後述のように、証如の先代実如期には交流した形跡があるが、その関係が濃密であったとは考え難く、その後も交流は知られない。そのような両者の関係性のなかで、所持物を所望すること自体が唐突である。義隆は明らかに瑪瑙を獲得するために本願寺に接触してきたのであり、これほど露骨に物欲を前面に出した交流の開始は珍しい。

さらに、証如に所望する瑪瑙については具体的な個数を提示していないのに対し、加賀産の瑪瑙については明確に個数を指定している。つまり、義隆はそれだけの瑪瑙が採れることを確信しているのである。そのうえ、義隆は瑪瑙の採掘場所を具体的に知っていた。しかし、義隆はその情報をどのように掴んだのか。証如もそこに疑問を覚えたようで、以下のような書状を江沼郡中に宛てて認めている。

【史料 9】証如書状案 本願寺文書（左右田 1995）

此儀早々申下候はんするを、はたと令^レ失念^ノ候
雖^レ不^レ思事候、從九州大内方^ニ就^レ渡唐之儀^ニ、瑪瑙廿所望之由候、近比造作たるへく候へ共、当郡東組なたの観音堂に在^レ之由被^レ申候、然者急度被^レ差上^ノ候者、よろこひ入候へく候、若於^下難^ニ相調^ノ儀^上者、則申され候へく候、（中略）

三月十日 証如（花押抹消）
江沼郡中へ

【史料 9】は、内容から考えて【史料 8】より後の時期に記されたことは間違いなく、天文 6 年と年代比定できる。書状案であるため、実際にこの通りに証如が江沼郡中に通達したかは分からないが、大内氏からの要請に「不_レ思事候」と、不審を表明している。

内容は、【史料 8】とほぼ同じであるが、大内氏の要請が『日記』の記事より具体的であり、近年は瑪瑙を採掘することが「造作」（骨折り）と認識されていたこと、那谷寺が江沼郡の「東組」管轄であったことが分かる。また、証如が江沼郡中に対して瑪瑙の手配を無理強いしないように、意識的に言葉を選んでいたことも印象的である。

いずれにせよ、かなり具体的に瑪瑙に関する情報を指摘されたことで、証如は義隆の要請を拒みがたい状況に陥ったであろう。それに対する証如から義隆への返事は、本文が長く煩雑になるため要約すると、次のようである（『日記』天文 5 年 12 月 28 日条）。

すなわち、証如は、加賀ではそろそろ雪が降り積もる時期になるため、義隆の要請を蔑ろにするわけではないと述べつつ、即応を避けている。一方で、「書状の様体」について、宛所を従前の「大内左京大夫」とすべきか、同年 9 月に任じられている「太宰大貳」を宛名に反映すべきか、公家衆に諮問している。それに対して公家衆は、「上意」がいまだ受け入れていない官職であるから、「左京大夫」が良いと返事している。また、坊官の下間上野に前住の実如がどのように宛名を記していたのか確認させたところ、それも「左京大夫」であったという。実如の前例の時期には義隆は「太宰大貳」任官前であるから当然に思われるが、そのような当然の判断さえできなくなるほど混乱していたのである。それにしても、証如が神経質なほど宛所の記載にこだわったのはなぜか。

一般に、この当時の書札礼がかなり格式張っていたことはよく知られている。また、書札礼を誤ると、関係性の崩壊にさえ招きかねない難しさも指摘されている（桜井 2011 など）。しかし、この事例の場合はそれだけではない。証如が強く意識しなければならなかったのは、「上意」すなわち將軍家の意向であった。

当時、本願寺が居を構えていた摂津国は細川京兆家の累代守護任国であり、晴元は大内氏と結んでいた同族の細川高国を滅ぼした。さらに、大永 3 年（1523）の寧波の乱に象徴されるように、渡唐船交易の面においても細川・大内両氏は天文年間にいたっても競合関係にあった（橋本 2014、岡本 2022）。一方、將軍義晴は晴元の意向よりも、政治的・経済的利益を優先して、將軍家との関係改善に取り組み始めた大内氏の渡唐船派遣を容認していたという（岡本 2022）。ただ、本願寺としては晴元の祖父政元や父澄元を重要視している側面もあった⁹。

⁹ 政元に関しては、聖徳太子の化身と位置づけ、永正年間には「京兆半將軍の様に今ハ威勢かきりなき

証如は、将軍家に接近しはじめた大内氏との間に禍根を残したくないという心情と、特に渡唐船交易については、細川氏と競合関係にある大内氏に過度に肩入れできないという政治的な事情の葛藤のなかにあり、それが義隆への返書に記す宛所についての混乱や、瑪瑙に関する返答の曖昧さにつながったといえる。

第2節 本願寺・大内氏の音信と瑪瑙

前節で見てきたように、証如は当初大内氏の瑪瑙所望に消極的な態度を示していた。とはいえ、曖昧な回答で済むはずはなく、義隆に返事したように雪が落ち着いたころ合いを見計らったのであろう、翌年3月には加賀国江沼郡の者たちに瑪瑙について問い合わせ（『日記』天文6年3月15日条）、6月末には瑪瑙が大坂に届き（『日記』同年6月27日条）、年末には改めて義隆に連絡した。

【史料10】『日記』天文6年12月1日条

一、九州大内へ已然被_レ申候キ瑪瑙数五以_二書状_一遣候、明日出舟有_レ之由候間遣候、堺ひらや取次候（後略）

上によると、証如は前年に義隆所望の瑪瑙を、堺町人の「ひらや」（正確には日比屋）を取次として5塊遣わしたという¹⁰。その理由は、翌日には大内氏が派遣する渡唐船が出航することを聞きつけたからとしている。

ここで指摘したいことは、2つある。1つめは、証如が大内氏に瑪瑙を送付した時期である。先述のように、証如が江沼郡に瑪瑙について問い合わせたのは3月である。加賀と大坂が物理的に離れていることを勘案しても、証如が江沼郡に瑪瑙の手配を要請してから半年以上も経っており、江沼郡と証如の交渉が順調ではなかったように思われる。言い換えれば、江沼郡は相当出し渋っていたのである。実際、瑪瑙を大坂に届けた際に、那谷寺からの書状の文面には、【史料9】において大内氏が想定した通り、瑪瑙の採掘が「造作」であったという。これは那谷寺周辺地域の者たちの不満というだけでなく、この書状と瑪瑙を大坂まで届けた江沼郡の者たちの不満でもあっただろう。

時期については、それだけではない。証如も大内氏の要請を受けてから江沼郡中に瑪瑙の

人」とその権勢を称揚していたと、本願寺一族の実悟が天正3年（1575）に記した（『山科御坊事并其時代事』、史料性格については、安藤 2008）。また、天文年間には晴元から徳政についての制札を得んとした際に、政元や澄元から発給されたという制札の存在を晴元に強調している（『日記』天文7年5月14日条）。

¹⁰ 岡本真氏は『日記』の原本調査の結果、「ひらや」と読むより、「ひびや」と読む方が正確ではないかと推測している（岡本 2013）。

手配を要請するまで3ヵ月もの時間をかけ、瑪瑙が届いてからは半年もの間大内氏に送っていない。前者については、証如は【史料 9】において「はたと」「失念」していたと述べているが、本当だろうか。本願寺の復興を目指して事細かに諸勢力とのやり取りを『日記』に書き残している証如が、大内氏の要請を「失念」していたとは信じがたい。むしろ、証如もまた大内氏に瑪瑙を差しだすことに抵抗を覚えるとともに、一向一揆の意向をも意識する必要に迫られるまで大坂に留めていたとも考える方が自然に思われる。

2つめは、義隆が20塊の瑪瑙を要求したのに対して、証如が送付したのは5塊に過ぎなかったことである。この疑問は、2つ目の疑問とも重なる部分があり、採掘が間に合わず5塊しか抛出できなかったのか、証如が江沼郡と交渉の末差し出させたのが5塊であったのか。この点は、関連する後掲史料も踏まえて改めて検討する。

とにかく義隆に瑪瑙を送付した証如であったが、義隆に対する彼の心象は相当悪かったのではないか。それは、その後の交流の様子から窺える。義隆が「祝着」と伝えてきたのは、更に1年後であり、しかも要件は別にあって、瑪瑙についての謝辞と返礼はそのついでという様相であった¹¹。しかもその要件は、「珍馬所望」であった（『日記』天文7年12月3日条）。その珍馬をどのように活用するのか、義隆は伝えてこなかったらしく『日記』に詳しい事情は記されていないが、瑪瑙に続いて非常に厚顔な要求であった。しかし、証如はこの義隆の要求にも応え、迅速に「無紋」の「鹿毛」を用意している（『日記』同月21日条）。

証如が用意した馬は、恐らく義隆が求めたような「珍馬」ではなく、ごくありふれた馬である。この対応だけでも十分に証如の心情を窺い知ることができるが、義隆は「珍馬」として届けられた馬について、また半年以上も経ってから本願寺に「祝着之由」を伝えてきた（『日記』天文8年8月27日条）。ほかにも、証如が「珍馬」を贈った際に、義隆の官位に関して誤った情報を聞いたため、書止文言を「恐惶謹言」にしたが、後に「恐々謹言」で良かったことを知って悔しがったという（藤井 2019）。

もっとも、音信物の返礼が遅くなることは珍しくはなく、書止文言を間違えたのも証如の間違いであるため、それをもって義隆への悪い感情を読み取ることはできない。ただ、中世後期の音信を検討した桜井英治氏によると、後小松上皇と伏見宮貞成親王の音信において、貞成への返信が遅かった点に政治的な格の差を見出している（桜井 2011）。義隆もまた、証如との格の違いを意識して遅く返礼した可能性はあるだろう。また、後者に関しては、書止文言を間違えたことを悔しがったことに、証如の悪感情を読み取れる。

もっとも義隆は官職が大宰大貳という高官の立場にあり、証如に不遜な態度をとっても

¹¹ 『日記』のなかで、「ついで」であると明記されているわけではないが、『日記』に記されている順番は、「珍馬所望」の件が先であり、「以前瑪瑙下候」ことへの「祝着」がその後の一つ書きに記されていること、本文で示したように、証如が瑪瑙を遣わしてから1年も経ってからの連絡であったことを踏まえれば、「ついで」であったとみるのが自然であろう。

義隆の意識としては当然であったかもしれない¹²。むしろ義隆としては、数は少ないとはいえ、証如が自らの期待通りに瑪瑙を送付したことに満足し、実如期から引き続き良好な関係を保っていると考えていたのではなかろうか。

そうした義隆の心情と関係するのか、大内氏の奉行衆である杉美作入道宗珊（興道）のことを証如は「門下ニ対して能人」と見ている（『日記』天文10年9月4日条）。もっとも、宗珊もまた証如への「音信」の「返礼」に「馬一疋所望」しているから、義隆と同じように、返礼目当ての門徒庇護であった可能性や、瑪瑙を送付した本願寺の対応への返礼であった可能性も含めて今後検討する必要があるだろう¹³。

一方証如は、困難な駆け引きのなかで、大内氏と加賀の一向一揆との板挟みにされていた。証如が、常に本願寺の政治的立場を賭けた交流を行わなければならなかった、その理由について再確認する必要がある。このような政治性の極めて強い交流のあり方を、史料上において「音信」という。遅くとも9世紀以降においては、「音信」は「便りをする事」（『日本国語大辞典』）を意味した。しかし、14世紀ころから「音信物。また、それを贈ること」（『日本国語大辞典』）を指すようになり、特に公家・武家・寺家など支配者層の間で使われるようになった（中世後期における「音信」については、羽下 1984、金子 1996、盛本 1997、桜井 2011、を参照）。

そして証如の音信については、石田晴男氏によって詳細に検討された。特に武家との音信の検討によって、その音信は地域社会の対立構造に関係なく行われたと指摘され、「本願寺にとって最大の要請」は、「自身の在立基盤を守」ることと、「門徒の保護と本願寺への参詣の保証」であったと結論付けられた（石田 1991: 10）。また、大内氏を始めとする西国大名と、本願寺の関係性を検討した神田千里氏は、「本願寺が大名らに音信を贈り、密接な交流を保つ理由」を、「門徒の活動に対する領主の好意を期待する」ことに見出している（神田 2014: 83）。義隆の不遜な態度も、それによる証如の心身の疲労や負担も、全ては門徒の保護を得ることによって、本願寺の基盤を確固たるものとするための努力であり、証如は耐えなければならなかった。

しかし、証如による瑪瑙を介した対大内氏の音信の態度にも変化が訪れる。その背景を知るには、本願寺の政治性のみならず、瑪瑙をめぐる加賀一向一揆、特に那谷寺を抱える江沼郡中がどのような態度を示したのか、現地の状況から捉え直す必要があるだろう。そこで次章では、『日記』から窺える本願寺の政治性、および江沼郡内における地域社会の動静を

¹² 当時の証如は、僧位が法印、僧官が大僧都であった。義隆の大宰大貳との格の上下関係は改めて検討する必要があるが、証如にも自らが高位の立場にあるという自覚があった可能性はあるだろう。なお、大内義隆の大宰大貳任官については、山田 2004 など。

¹³ 伊藤幸司氏は、杉氏は堺において「日明貿易の工作員」として活動していたと指摘し（伊藤 1998: 223）、それを承けた大畑博嗣氏は、杉氏が音信を介して本願寺と直接的交流を行っていたと推測した（大畑 2007）。

検討する。

第3章 証如の音信と大内氏

第1節 証如の音信政策と加賀の瑪瑙

まず、本願寺と大内氏の瑪瑙をめぐる交渉の前提となった、前章で述べたような証如による音信の政治的性格のなかで大内氏との音信をどのように位置付けることができるのか、その位置づけが本願寺と大内氏の交渉にどのような影響を与えたのかを考える。そのために、天文9年（1540）以降の大内氏をめぐる証如の音信について、『日記』をもとに確認する。当時の大内氏は山陰の尼子氏と対立しており、次の記事のごとく証如もそれを知っていた。

【史料 11】『日記』天文9年4月20日条

一、從_二渋川_一以_二一札_一、尼子事大内ト令_レ致_二参会_一、同時ニ可_二上洛_一由沙汰候、又可_レ及_二執相_一とも申候、無_二正儀_一之旨被_二申上_一候、此使ハ光照寺上_レ之

上によると、尼子氏と大内氏がともに上洛する計画があったという。その計画が何者によって計画され、どのような目的をもっていたのか明記されていないが、その一報を伝えた備後国守護渋川氏によると、両者はともに上洛するどころか、合戦になる可能性も指摘され、世上の様子は明らかではないという¹⁴。

渋川氏は足利将軍家の「御一家」であり、室町期まで各地に分国を持っていたが、戦国期には弱体化しつつあった。近年はその「権威性」をもって「しぶとさ」を評価する研究も見られるが（谷口 2022）、実力面において天文年間にはいずれの分国においても衰退しつつあったことは否定できない。その分国の1つが備後であり、当時は尼子氏の庇護下にあった。この書状を本願寺へ持参したのは、備後の本願寺派寺院である光照寺であり、本願寺と尼子氏の音信の契機をもたらした寺院であった（『日記』天文6年7月30日条）。

そして、【史料 11】の様子から分かるように、本願寺は尼子氏とも友好関係を築いており、その音信のなかで西国の状況について情報を共有されるなど、大内氏との音信と比べて深い関係を有していた。

しかし、上のような本願寺の姿勢にもかかわらず、義隆は4年後の天文16年（1547）に派遣する渡唐船に向けて、再び本願寺に瑪瑙を要求した（『日記』天文11年12月26日条）。次の記事は、それに対する証如の返事である。

¹⁴ 木下昌規氏は、天文7年9月に将軍義晴が尼子氏に宛てて、細川晴元および六角定頼と相談のうえで忠節を尽くすよう求めた御内書から、尼子氏は上洛のために大内氏との連携を模索したと推測した（木下 2020）。実際には上洛に至らなかったようであるが、史料 11 と関連する計画だったのであろうか。

【史料 12】『日記』天文 12 年 2 月 14 日条

一、大内へ以返状就渡唐瑪瑙事、以前被申候時、加州那多寺輩為觀音堂之神秘之間、不_レ可_レ出之由種々雖_レ申_レ之、向後之儀者不_レ可_レ令_レ所望、今度計可_レ出_レ之候、依種々申下、先年令_レ遣事候間、重而之儀者中々不_レ可_レ相調候間、不_レ及_レ申下候、更非_レ等閑之由委曲頼堯方より陶安房守方へ可_レ申下之由、申_レ付之、返状出_レ之

証如は、ついに義隆の要請を拒否した。すなわち、瑪瑙は「觀音堂之神秘」であると「那多寺輩」が主張するので、前回は何とか送付してもらったが、2 度目は聞くまでもなく断られるだろうと返事したのである。そこで、加賀産瑪瑙とそれにまつわる地域社会の様子について、【史料 12】の検討を通して確認する。

まず瑪瑙の送付に反対した「那多寺輩」とは、何者であろうか。那谷寺（「那多寺」）は養老元年（717）に泰澄を祖として、江沼郡内に建立されたという真言宗寺院であったが、戦国期の那谷寺は越前平泉寺の衆徒の押領などに悩まされており、幕府に訴えるなど様々に対策を講じていたが、その寺領は安定していなかった（『日本歴史地名大系 17 石川県の地名』）。「那多寺輩」については、那谷寺の寺僧集団と考えるのが妥当と思われるが、権門と呼べるほどの勢力は保持せず、その集団が実力面において自らを大きく上回る大内氏の意向に背く背景には、「那多寺輩」にも何らかの実力面における裏付けが必要であったと思われる。そこで思い起こすべきは、【史料 9】のなかで那谷寺觀音堂が江沼郡「東組」の管轄であったことであろう。

加賀一向一揆の「組」は本願寺門徒としての信仰を紐帯とした組織であり、実態としては現地秩序（成敗権・闕所処分権など）を維持する地域的一揆としての側面をもち、天文年間においては証如の直属軍事力の編成単位であったという（金龍 1977、神田 1985、藤木 1985）。また、江沼郡中の「郡」の権限は天文年間には「組」に吸収されており（金龍 1977）、觀音堂周辺についても加賀一向一揆が支配していたと考えられる。つまり、瑪瑙を大坂へ送るか否かは、一向一揆の「江沼郡中」の「東組」に属する者たちの意向次第であった。

次いで、「那多寺輩」が主張したという、觀音堂の「神秘」について考える。「神秘」には「神業として秘めておくこと」、「人の知恵でははかり知れない、靈妙不思議な秘密」という 2 つの意味がある（『日本国語大辞典』）。一般には、後者の意味として理解されることが多いが、前者の含意も重要であり、両方の意味を踏まえて瑪瑙の採掘方法や瑪瑙の産出場所を「神秘」化することで、大内氏の要請を拒む理由付けとしたのであろう。

それとともに、証如が加賀に確認するまでもなく義隆の要請を拒否したことも重要である。この判断の一因は、たしかに「那多寺輩」の反対であろう。また、本願寺と強く結びついていた細川氏や本願寺と友好関係を築いていた尼子氏と、大内氏が様々な面に対抗関係にあったことも影響しているであろう。しかし、それだけではあるまい。これまでの義隆と

の音信のやり取りのなかで、証如が義隆に抱いた心象は良くなかった。義隆による音信の態度は非常に即物的であり、多くの音信相手とは暗黙の了解となっていた普段からの交流という前提が欠如していた。音信の開始に契機があることは不自然ではないが、大内氏の場合はその後も本願寺との日常的な交流を怠っていた。端的に言えば、大内氏は本願寺を一方的に利用するにとどまっており、証如が本願寺に大きな利益をもたらさない大内氏との音信に消極的なのは当然であった。

そのような人物の無理な要請について、改めて現地の者に問い合わせて反発を受けることを証如は避けたのではなかろうか。証如は大内氏の機嫌を取ることも、一向一揆の意向を優先したのである。この事例から分かるように、証如の音信活動は単なる儀礼行為にとどまらず、また意向が対立する複数の勢力に挟まれた場合には完全に中立的な立場を堅持していたわけでもなく、その時々で両天秤にかけて政治的判断を下していたのである。瑪瑙をめぐる交渉において、証如の判断材料として重要な位置を占めたのは、加賀国内の動向であろう。

そこで次節では、本節で大内氏の渡唐船交易の概要と瑪瑙についての基本情報を踏まえたうえで、加賀の瑪瑙と大内氏による渡唐船交易の関係について考える。大内氏は室町期から長く渡唐船交易に携わってきたが¹⁵、足利義満が応永 10 年（1403）に派遣した遣明船の進貢物には瑪瑙 32 塊、その後の足利義教期以降の 3 度の遣明船においても瑪瑙が大小合わせて 20 塊が積載され、その品目に大きな変化はなかったという（田中健夫 1961）。それほど瑪瑙は需要があったのであり、渡唐船交易において瑪瑙が大きな利益をもたらすことを、大内氏も知っていたであろう。

瑪瑙の主な産地は現在の北海道や富山県、石川県であり、かつては越前から供給していたという（伊藤 2006、2015）。大内氏の分国内では瑪瑙をほとんど採れなかったと思われ、それを他所に求めたことは納得できるが、なぜ加賀の那谷寺で採れることを知っていたのか、しかもかなり具体的に場所を指している。そして、それに対して江沼郡の者たちは反発したが、それはなぜかについて検討する。

第 2 節 一向一揆と加賀大内氏

前節で指摘した、江沼郡中の瑪瑙についての対応の背景を考えるにあたって、重要なのは加賀大内氏の存在である。この一族は後掲【史料 13】のように加賀国江沼郡分校（現在の石川県加賀市）に所領を有し、天文年間には証如に加賀一向一揆による所領違乱を抑止するよう求めている。また、加賀大内氏の求めについて大内義隆も後押しして、証如に同様のこ

¹⁵ 田中健夫氏作成の「遣明勘合船一覧」によると、大内船が明へ渡ったのは宝徳 3 年（1451）が最初である（田中健夫 1961）。

とを要請している。つまり、加賀大内氏は江沼郡の特定の場所に瑪瑙が埋まっていることを知り得たうえに、周防大内氏とも友好的であったため、周防大内氏に瑪瑙について情報提供する可能性も高かった。そして、加賀大内氏と江沼郡の者たちの関係については、如上の所領違乱の状態から分かるように、対立的であった。

また、江沼郡の者たちが瑪瑙の抛出に抵抗した理由も、この両大内氏との対抗関係から説明できる。両者は利害関係において対立していたのであり、その加賀大内氏と結ぶ義隆を利用するような音信を歓迎するはずはなかった。しかし、証如の音信は一向一揆にとっても魅力的であり、その音信を介した政治的関係の悪化は、一向一揆の政治力の減退をも意味したから、1度の瑪瑙の抛出は妥協したが、2度目は断固として拒否したのである。

それに関連して、興味深いのは次の記事である。

【史料13】『日記』天文5年（1536）閏10月7日条

一、大館兵庫頭先日被_レ申、（中略）又分校^{大内竹千世}事者上意御敵たるのよし候而、申付候へと被_レ申候

一、大館左衛門佐先度被_レ申為_二御代官_一野代庄事、武衛ハ御礼不_二申入_一候、無_二御許容_一候、又左衛門佐知行笠野村之事ハ西坊城勅勘之由被_レ申候而、何も申付候へと被_レ申候、書状来ル

分校とは江沼郡内の地名であり、現地にいた大内竹千世（加賀大内氏当主）は「上意御敵」であるから、その実効支配を妨げるようにと、幕府に仕える大館兵庫頭（高信）が本願寺に指示してきた。また時を同じくして、弟の左衛門佐（晴光）が幕府の御料所である野代荘（現在の石川県小松市）の代官として、「武衛」（渋川氏）による幕府への「御礼」が無かったことから、「武衛」が幕府に憎まれていることを伝え、晴光の知行地である笠野村（現在の石川県津幡町）についても「勅勘」を蒙った坊城氏をめぐる状況を通達し、両者による野代荘・笠野村の経営を排除するよう求めたのである。

加賀大内氏については、須田牧子氏による整理があるため、それによって概略を示すと以下のようなものである（須田 2008）。加賀大内氏は、室町幕府の奉公衆であり、南北朝・室町初期に周防大内氏から分かれたという。また、加賀大内氏と周防大内氏の関係は、「両輪之様」であったという（『日記』天文11年5月12日条）。ただし、その後の両氏の関係については課題とされており、本節はわずかながらそれに応えるかたちになるであろう。

大館高信は、幕府の内談衆という要職を務めた大館常興の庶子であり、大館氏の嫡流を相続した弟の晴光に比べて事績は明らかではないが、この兄弟の関係性が悪かったとは考えられていない（設楽 2000、木下 2020）。加賀大内氏の「上意御敵」認定は、大館兄弟を通して幕府が取り決めたのであろう。

また、幕府に敵視されたのは「武衛」（渋川氏）も同様である。渋川氏は野代荘の代官と

して活動していたことが知られており（『日本歴史地名大系 17 石川県の地名』）、この時期にその役割を喪失したのであろう。

そして、以下の記事はその後の加賀大内氏とのやり取りである。

【史料 14】『日記』天文 11 年 5 月 13 日条

一、大内四郎へ返礼遣之時、知行事為_二 室町殿_一度々雖_レ被_レ仰_二付于大館兵庫_一、領主在庄之間、難_二申付_一之由申上候通、以_二使者_一申出也

【史料 13】において「竹千世」を名乗っていた加賀大内氏の当主は、証如との音信が途切れた数年の間に「四郎」と改名していた（『日記』天文 11 年 5 月 12 日条）。そして前日に大坂を訪れた四郎は「取乱」していたようで、証如に慰留されている。そして、翌日に幕府から「上意御敵」と認定された自らの知行地について、証如は幕府がどのように本願寺に要請し、本願寺がどのように対応していたのか、改めて伝えたのであろう。

では、四郎はなぜ取り乱して遠く大坂を訪れたのか。証如の翌日の対応を踏まえると、四郎は一向一揆との対立が激化したことによって、知行地を追われたのではなかろうか。そして一向一揆が本願寺の指示で四郎を攻撃したと考え、その背景に幕府の要請を推測して大坂に至ったと考えられる。むしろ 12 日に四郎がその不審を含むような話題を提したのでなければ、翌 13 日に証如が自身の対幕府交渉を四郎に連絡する必要性がない。もっとも、証如はたしかに幕府の要請を受け付けなかったから、四郎への説明には嘘はない。本願寺には、現地の政治的な争いには介入しないという原則があり（神田 1998）、現地において経営を行う領主がいる場合には、四郎についても「于_レ今彼在所に居住候て、（中略）国ニ主候て被_レ執候条、難_二申付_一」（『日記』天文 5 年 10 月 9 日条）と幕府に答えており、慎重であった。

そして、【史料 14】を最後に『日記』中に加賀大内氏の動向は見られなくなる。大内四郎が病没したのか、他国へ亡命したのか分らないが、加賀大内氏が加賀国内の権益を完全に喪失して本願寺にとって無縁の存在となったことは、おそらく間違いない。そしてそれと同時に、周防大内氏もまた加賀国との結びつきを喪失したのである。義隆が前述のように瑠璃を再び求めたのは、【史料 14】の翌年であり、証如はこれを拒否した。

本章を通して明らかなように、加賀一向一揆からも、証如を庇護する細川氏からも敵視され、さらには不遜な態度をとって証如の不興を買った大内義隆による、厚顔な要請が何度も通るはずはなかった。しかも、幕府による「上意御敵」認定や加賀一向一揆による攻勢を経て加賀大内氏が没落したことで、周防から遠隔に影響力を行使することもできなくなった。こうして証如と加賀一向一揆の利害の一致は、大内氏と加賀のつながりを絶った。そして大内氏が瑠璃という重要交易品を入手する経路を喪失させる結果に至ったのであり、少なからず大内氏による渡唐船交易にも影響を与えたのではなかろうか。

むすび

本稿では、天文年間における本願寺・一向一揆の活動を国際関係史に位置付けるべく、渡唐船交易における大内氏の活動と本願寺・一向一揆の関係について、瑪瑙という交易品をめぐる交渉をもとに追究した。すなわち、第1章においては、細川晴元の渡唐船派遣計画について本願寺がその人脈を活かして主体的に関わっていたことを確認した。次いで第2章においては、大内氏が渡唐船交易において重要交易品であった瑪瑙を手に入れるために本願寺に接近したことから、両者の折衝が始まり、政治的葛藤などを見ることで本願寺の政治的姿勢が国際関係史に影響を与えていたことを確認した。そして第3章においては、天文8年度渡唐船に積載する瑪瑙を、本願寺を介して手に入れたことで味をしめた大内氏が、天文16年度渡唐船に向けて、再び本願寺に瑪瑙を求めた折衝から、本願寺が大内氏の所望よりも、瑪瑙を産出する加賀の一向一揆の意向を重視した事実を確認した。

すなわち、本稿を通じて協調したいことは、本願寺の主体的判断が瑪瑙を通じて国際関係史に大きな影響を与えたこと、そして、その判断の背景には一向一揆の意向があったことである。

とはいえ、本稿の所論は限定的なものであり、それによって本願寺や一向一揆を国際関係史に十分に位置付けたとは言い難い。いまだ課題は山積しており、それらの全てに取り組むことは史料的制約からも難しいが、幾ばくかの展望を述べて本稿の結びとしたい。

本稿では、『日記』の記事を通して渡唐船に関する証如や一向一揆の動きを追究した。しかし、国際関係史に関係する本願寺や一向一揆についての史料は、『日記』に限らない。例えば、後世の史料においては、天文年間に「唐船」が加賀国宮腰（『金沢古蹟志』巻14ノ1）や、越前三国港に着岸した事例（『朝倉始末記』）が知られる。前者は加賀の一向一揆の膝元であり、後者についても隣国越前への「唐船」着岸が加賀に無関係であったとは考え難い。また、一次史料においても、本願寺一族の順興寺実従の日記『私心記』に「唐船」記事が数点見られる。では、そのような事態に対して、本願寺や一向一揆はどのように対応したのか、先行研究においてもほぼ未検討のままである。今後は、それらの史料も合わせて検討する必要がある。

《参考文献》

安藤弥『戦国期宗教勢力史論』（法蔵館、2019年）

——「戦国期真宗の歴史認識—『山科御坊事并其時代事』から『本願寺作法次第』へ—」（同上、初出2008年）

石田晴男『『天文日記』の音信・贈答・儀礼からみた社会秩序—戦国期畿内の情報と政治社会』『歴史学研究』627、1991年

- 伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、2002年）
- 「大内氏の日明貿易と堺」（同上、初出1998年）
- 「史料紹介 妙智院所蔵「天文十二年後 渡唐方進貢物諸色注文」『市史研究ふくおか』1、2006年
- 「『天文十二年後 渡唐方進貢物諸色注文』一朝貢品をいかに調えるか」（村井章介代表編集『日明関係史研究入門 アジアのなかの遣明船』勉誠出版、2015年）
- 井戸裕貴「天文年間の尾張国と平手政秀」『歴史研究』725、2024年
- 「天文の一向一揆と証如の音信戦略」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集（日本文化専攻編）』16、2025年
- 井上鋭夫『一向一揆の研究』（吉川弘文館、1968年）
- 大畑博嗣「遣明船をめぐる本願寺・一条氏・大内氏・堺の関係—『天文日記』を中心に—」『歴史の広場』9、2007年
- 岡本真『戦国期日本の対明関係 遣明船と大名・禅僧・商人』（吉川弘文館、2022年）
- 「堺商人日比屋と十六世紀半ばの対外貿易」（同上、初出2013年）
- 「「堺渡唐船」考」（同上、初出2015年）
- 「天文年間の遣明船と大内氏の国内活動」（同上）
- 笠原一男『一向一揆の研究』（山川出版社、1962年）
- 金子拓「室町時代における贈与交換—進物折紙と室町幕府財政」（『中世武家政権と政治秩序』吉川弘文館、1998年、初出1996年）
- 神田千里「長享二年の加賀一向一揆について」（『一向一揆と真宗信仰』吉川弘文館、1991年、初出1985年）
- 「戦国期本願寺教団の構造」（『一向一揆と戦国社会』吉川弘文館、1998年、初出1995年）
- 「室町幕府と本願寺」（同書）
- 「本願寺の行動原理と一向一揆」（同書）
- 「天文の畿内一向一揆ノート」（千葉乗隆編『日本の歴史と真宗』自照社出版、2001年）
- 「戦国期本願寺と西国大名」（中川正法他編『九州真宗の源流と水脈』法蔵館、2014年）
- 木下昌規『足利義晴と畿内動乱 分裂した将軍家』（戎光祥出版、2020年）
- 金龍静『一向一揆論』（吉川弘文館、2004年）
- 「加賀一向一揆の構造」（同上、初出1977年）
- 「畿内の天文一揆考」（同上、初出1989年）
- 黒嶋敏「山伏と将軍と戦国大名」（『中世の権力と列島』高志書院、2012年、初出2004年）
- 小島道裕『戦国・織豊期の都市と地域』（青史出版、2005年）
- 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院、1941年）
- 左右田昌幸「天文五年・六年証如書状案」『本願寺史料研究所報』11、1995年
- 桜井英治『贈与の歴史学 儀礼と経済のあいだ』（中央公論新社、2011年）

- 塩谷菊美『石山合戦を読み直す』（法蔵館、2021年）
- 設楽薫「将軍足利義晴の嗣立と大館常興の登場―常興と清光院(佐子局)の関係をめぐって」『日本歴史』631、2000年
- 須田牧子「加賀の大内氏について」『山口県地方史研究』99、2008年
- 瀬戸薫「室町期武家伝奏の補任について」『日本歴史』543、1993年
- 田中清三郎「本願寺経済研究序説―本願寺の領主化について」『社会経済史学』11―10、1942年
- 田中健夫『中世海外交渉史の研究』（東京大学出版会、1959年）
- 田中健夫著、村井章介編『増補 倭寇と勘合貿易』（筑摩書房、2012年、原著1961年）
- 谷口雄太『足利将軍と御三家 吉良・石橋・渋川氏』（吉川弘文館、2022年）
- 中井伊與太「慈光寺」（堺市編・三浦周行監修『堺市史第7巻 別編』清文堂出版、1966年、原著1930年）
- 中脇聖「摂関一条家と土佐一条家に仕えた「家司」」（同編『家司と呼ばれた人々 公家の「イエ」を支えた実力者たち』ミネルヴァ書房、2021年）
- 仁木宏『空間・公・共同体』（青木書店、1997年）
- 羽下徳彦「中世後期武家の贈答おぼえがき」（『中世日本の政治と史料』吉川弘文館、1995年、初出1984年）
- 橋本雄『中世日本の国際関係 東アジア交通圏と偽使問題』（吉川弘文館、2005年）
- 「東アジア世界の変動と日本」（『岩波講座日本歴史8 中世3』岩波書店、2014年）
- 藤井崇『大内義隆 類葉武徳の家を称し、大名の器に載る』（ミネルヴァ書房、2019年）
- 藤木久志「織田政権の成立」（『戦国大名の権力構造』吉川弘文館、1987年、初出1975年）
- 「一向一揆論」（『戦国史をみる目』法蔵館、2024年、初出1985年）
- 三浦周行「日明貿易再興に関する努力」（堺市編・三浦周行監修『堺市史 第2巻』清文堂出版、1966年、原著1930年）
- 峰岸純夫「大名領国と本願寺教団―とくに畿内を中心に」（『中世社会の一揆と宗教』東京大学出版会、2008年、初出1974年）
- 村井章介『世界史の中の戦国日本』（筑摩書房、2012年、原著1997年）
- 盛本昌広『日本中世の贈与と負担』（校倉書房、1997年）
- 山田康弘「大内義隆の太宰大貳任官と将軍」『戦国史研究』47、2004年

井戸 裕貴（いど・ゆうき）

愛知県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程在学中。専門は日本中世史。特に戦国期の本願寺や一向一揆の政治的な動きや軍事行動への分析を起点として、戦国期の政治史や地域史を研究している。soukenzi92@gmail.com